

2 選ばれる魅力的な地域づくり

我が国を訪れる外国人数は、コロナ禍を経て、2025年には過去最高を記録しましたが、本県を訪れる外国人数は、コロナ禍前を下回る水準となっており、東京都や大阪府などと比較しても低い伸びにとどまっています。

こうした中、本県では2026年にアジア競技大会・アジアパラ競技大会が開催され、国内外から多くの人々が訪れるとともに、本県の魅力を発信する大きな好機となるほか、様々な魅力的なイベントが開催される愛知国際アリーナ（IGアリーナ）や愛知県国際展示場（Aichi Sky Expo）、スタジオジブリ作品の世界観を表現するジブリパークは本県の吸引力をより一層高めています。

本県では、この好機を活かして、愛知ならではの魅力を活かした観光を推進するとともに、国内旅行者はもとより、訪日外国人旅行者の呼び込みを一層強化し、地域の活性化に結び付けていく必要があります。

また、本県の若年層の東京圏への流出が進み、東京圏への一極集中が再加速する中、県内への定着や県外からのU I Jターンを促進するため、本県の居住地としての魅力を創造し、本県の「住みやすさ」を発信する取組を進める必要があります。

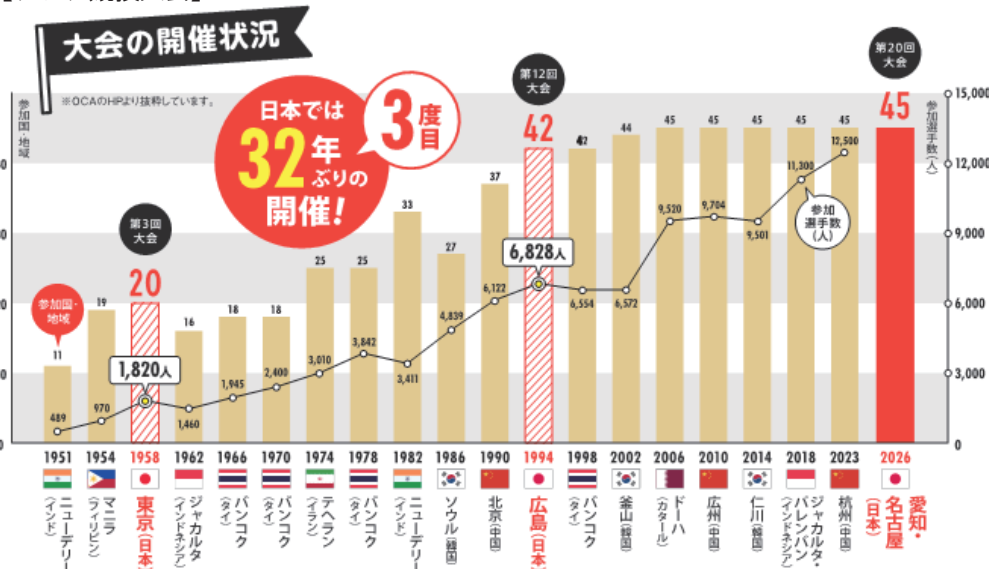
こうした取組により、選ばれる魅力的な地域づくりを進めていきます。

1 アジア競技大会・アジアパラ競技大会の開催と愛知国際アリーナ（IGアリーナ）の整備

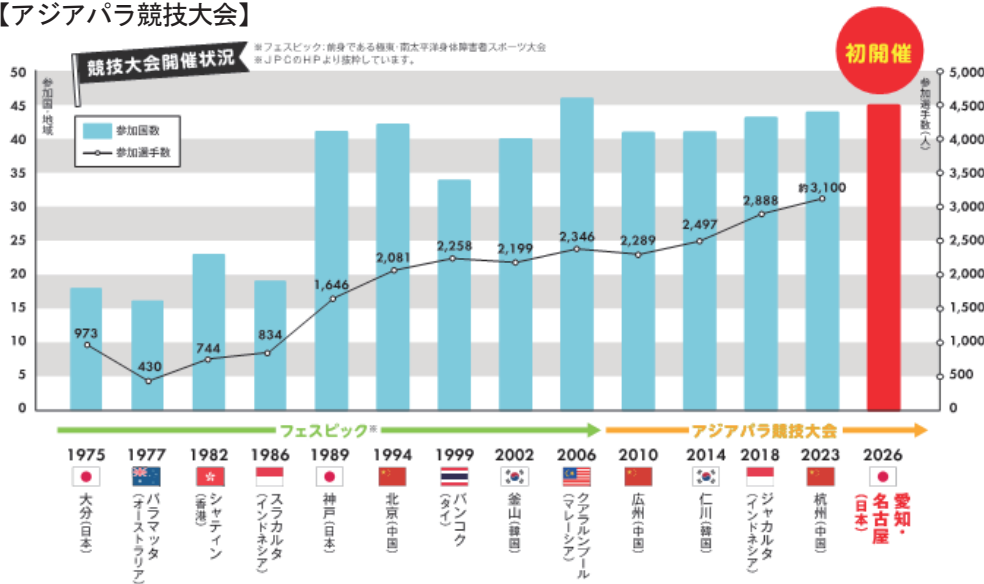
(1) アジア競技大会・アジアパラ競技大会の開催

2026年9月に愛知・名古屋で開催されるアジア最大のスポーツの祭典であるアジア競技大会と、同年10月に開催されるアジア地域の障害者総合スポーツ大会であるアジアパラ競技大会は、アジアの45の国と地域が参加する、国内のスポーツ界にとって東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の次なる大きな目標であり、拡大するアジアとの交流を一層深める機会となるなど、我が国全体にとっても大変意義のある大会です（図表2-3-2-1）。

図表2-3-2-1 アジア競技大会・アジアパラ競技大会の開催状況
【アジア競技大会】



【アジアパラ競技大会】



「<中学生向け>第20回アジア競技大会・第5回アジアパラ競技大会PRパンフレット」

また、国内外からアスリートや観戦客など多くの人々が当地域を訪れ、交流することにより、多様性を尊重し合う共生社会の実現にも貢献することが期待されています。

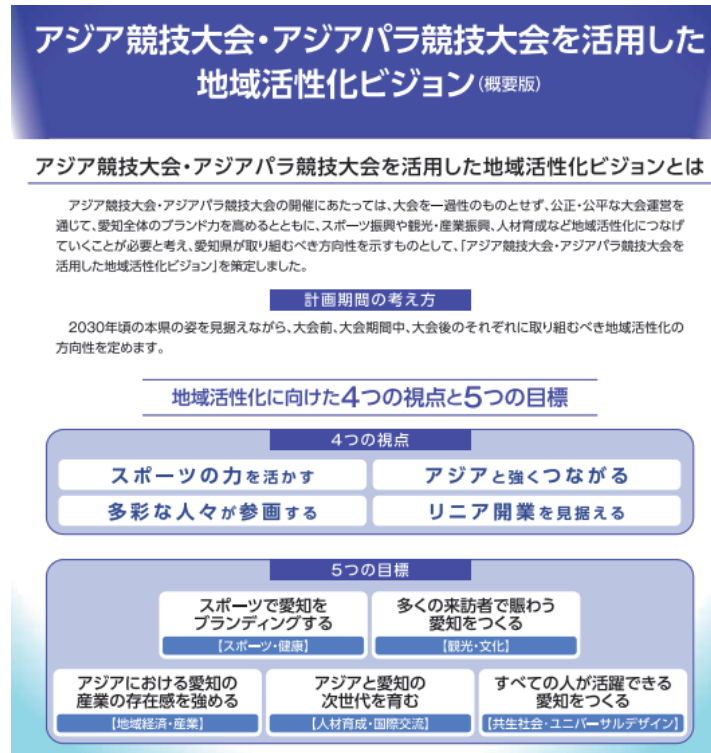
大会の開催に向けては、公募によって選ばれたマスコットキャラクターの活用をはじめ、2025年9月、10月には県内各地で1年前イベントを開催するなど、開催機運の醸成を図っています(図表2-3-2-2、2-3-2-3)。また、メインスタジアムである瑞穂公園陸上競技場をはじめ競技会場等の整備を進めています。



さらに、大会を成功に導くだけでなく、県内各地域におけるスポーツイベントの活性化やスポーツボランティアの確保・育成、本県の魅力発信やアジア地域との交流の促進など、「アジア競技大会・アジアパラ競技大会を活用した地域活性化ビジョン」に基づく取組を通じて、大会を一過性のものとせず、幅広い分野で地域活性化につなげていくことが重要です(図表2-3-2-4)。

2025年3月には、本ビジョンの実現に向けた取組の工程を大会前、大会期間中、大会後の区分に分けて整理したロードマップを策定しました。引き続き、様々な方々と連携・協働しながら、大会の機を捉えた取組を進めていきます。

図表2-3-2-4 アジア競技大会・アジアパラ競技大会を活用した地域活性化ビジョン



(2) 愛知国際アリーナ（IGアリーナ）のグランドオープン

大相撲名古屋場所の開催など愛知県体育館の伝統や歴史を受け継ぎ、新たな愛知・名古屋のシンボルとなる施設として、2025年7月にIGアリーナがグランドオープンしました（図表2-3-2-5、2-3-2-6）。

IGアリーナは、民間企業のノウハウを最大限に活かすため、アリーナとしては国内初となる、設計・建設から30年間の運営までを委託するBTコンセッション方式を採用し、最大収容人数17,000人、天井高約30m、国内最大級の8面体センターハングビジョン、最先端のICT技術などを備えた、世界トップレベルのグローバルアリーナとなっています。

大相撲名古屋場所をこけら落としとするグランドオープンに先立ち、5月31日、6月1日にオープニングイベントを開催し、開業式典ではエンタメ界をリードする音楽プロデューサー・演出家の滝沢秀明氏が、オープニングアクトを演出しました。

グランドオープン後は、8月の八村塁選手によるバスケットボールキャンプ、9月の井上尚弥選手のボクシング世界戦、12月のISUグランプリファイナル国際フィギュアスケート競技大会愛知・名古屋2025、2026年2月の東京ガールズコレクションと連携した「あいち・なごやFASHION DAYS」など国内外から注目されるイベントが多数開催されました。さらには、名古屋ダイヤモンドドルフィンズのホームゲームも開催され、2027年1月の「B.LEAGUE ALL-STAR GAME 2027」など、今後も魅力的なイベントが続々と開催予定です。

また、本県では産学官等の連携によりスポーツ分野のイノベーションを推進する「あいちスポーツイノベーションプロジェクト」を実施しています。2025年度は、名古屋ダイヤモンドドルフィンズとIGアリーナを連携パートナーとして、「名城エリアをバスケット城下町に」をテーマに事業提案を募集し、笑顔を寄付に変えるシステム「スマイラル」を活用した実証実験を行いました。

さらに、IGアリーナはアジア競技大会・アジアパラ競技大会の競技会場としても利用される予定です。今後も愛知・名古屋にさらなる賑わいをもたらす施設となるよう、世界最高峰のスポーツ・エンターテインメントを発信していきます。

図表2-3-2-5 IGアリーナ



提供：(株)愛知国際アリーナ

図表2-3-2-6 オープニングイベントの様子



提供：(株)愛知国際アリーナ

2 ジブリパークを活用した圏域全体の魅力発信

(1) 県内有数の観光スポットとしてにぎわうジブリパーク

ジブリパークは、2005年に本県で開催された愛知万博の理念と成果を次世代に継承し、愛・地球博記念公園の魅力と価値を一層高めるため、スタジオジブリ作品の世界観を表現した唯一無二の公園施設として本県が整備し、2022年11月に開園しました(図表2-3-2-7)。

2024年3月に全5エリアでの営業を開始して以来、初めて通期営業を実現した2024年度の愛・地球博記念公園の推計来場者数は、約294万人と、本県が2020年2月に公表した想定来場者数280万人を突破し、県内有数の集客施設である「東山動植物園」、「名古屋港水族館」、「名古屋城」を上回るなど、ジブリパークは既に愛知の観光に欠かせない存在となっています。

図表2-3-2-7 ジブリパーク

「ジブリの大倉庫」の「中央階段」



「魔女の谷」の「ハウルの城」



© Studio Ghibli

すそ野の広い、全国・世界中のジブリファンを誘客できるジブリパークの存在は、まだ大きな可能性を秘めていると見込まれるため、一層の効果創出に向けて、来園者のさらなる満足度向上や、県内への宿泊・周遊観光の促進に向けた取組が求められます。

このため、夏の熱中症対策に係る調査検討や、首都圏・関西圏における「ジブリパークのある愛知」をイメージしたキービジュアルや観光動画によるPR・プロモーション活動を進めています（図表2-3-2-8、2-3-2-9）。

図表2-3-2-8
愛知観光動画「風になって、遊ぼう。」キービジュアル



© 2022 Studio Ghibli

図表2-3-2-9
「ジブリパークのある愛知」ロゴマーク



(2) 愛知万博 20 周年記念事業「愛・地球博 20 祭」の開催

2025 年に愛知万博の開催から 20 年を迎えるに当たり、2025 年 3 月 25 日から 9 月 25 日までの 185 日間、愛・地球博記念公園において、愛知万博 20 周年記念事業「愛・地球博 20 祭」を開催しました（図表 2-3-2-10）。この事業では、「つなぐ未来（あした）へ」をメインテーマに、万博を知らない子どもや若者を中心にその理念や成果を継承するとともに、愛知の魅力を広く発信しました。

会期を通して、過去から現在までの公園の移り変わりや、万博の理念と閉幕までの歩み等を映像やイラストを活用し紹介する特別展示を実施したほか、県内の全 54 市町村が「ナンバーワン・オンリーワン」をテーマに、グルメ・歴史・伝統芸能などを発信した「集まれ！あいちの魅力博。」等のイベントを行い、公園を訪れた国内外の方に本県の魅力を PR する取組を実施しました。

図表 2-3-2-10 愛知万博 20 周年記念事業 概要、ロゴマーク

会期	2025 年 3 月 25 日(火)～9 月 25 日(木) [185 日間] ※2005 年の愛知万博と同じ会期
会場	愛・地球博記念公園
愛称	愛・地球博 20 祭
来場者数	約 191 万人
メインテーマ	つなぐ 未来（あした）へ
サブテーマ	①愛知で、さがそう！遊ぼう！つながろう！ ②語りあおう！つなげよう！自然の叡智



3 愛知発の文化芸術の育成・発信

(1) 国際芸術祭「あいち 2025」の開催

国内外から人を惹きつけるためには、愛知から新たな文化芸術を創造・発信するとともに、愛知の自然、歴史及び風土に培われてきた特色ある文化芸術の振興・発信が必要です。

本県では、世界に向けた文化芸術を創造・発信する中心事業として、2010年から開催してきた国内最大規模の芸術祭の一つである、国際芸術祭「あいち 2025」を2025年9月13日から11月30日まで開催しました（図表2-3-2-11）。

国際芸術祭「あいち 2025」では、芸術監督にフル・アル・カシミ氏を迎え、「灰と薔薇のあいまに」の開催テーマのもと、22の国と地域から62組のアーティストが参加し、愛知芸術文化センターをはじめ、愛知県陶磁美術館、瀬戸市のまちなかななどで最先端の芸術を発信しました（図表2-3-2-12）。

期間中の来場者は約52万人で、前回2022年の約48万人を上回り、芸術の素晴らしさとともに、愛知の魅力を国内外へ発信する芸術祭となりました（図表2-3-2-13）。

また、来場者における海外居住者の割合は3.9%と、コロナ禍前の2016年や2019年の開催時と比べて増加しており、国際的な認知度の向上に一定の成果が確認されました（図表2-3-2-14）。引き続き、国際的なネットワークや交流の場等を通じて海外での周知を一層強化し、さらなる誘客を図っていきます。

図表2-3-2-11 国際芸術祭「あいち 2025」の概要

テーマ	灰と薔薇のあいまに A Time Between Ashes and Roses
開催期間	2025年9月13日(土)～11月30日(日) [79日間]
会場	愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館、瀬戸市のまちなかな
来場者数	524,069人
芸術監督	フル・アル・カシミ（シャルジャ美術財団理事長兼ディレクター、国際ビエンナーレ協会（IBA）会長）
開催内容	[現代美術] 国内外のアーティスト及びグループの国際色豊かな現代美術作品を愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館、瀬戸市まちなかで広域に展開
	[パフォーマンスアート] 国内外の先鋭的な演劇、ダンスなどの舞台芸術作品を上演
	[ラーニング] ボランティアによるツアープログラムや、子どもたちが現代アートに触れる機会を創出する学校向けプログラム、参加型のトークイベントなどを実施
	[連携事業] 県内芸術大学をはじめ、多様な主体との連携による事業展開、参加アーティストによる短期間の巡回展示を県内で開催

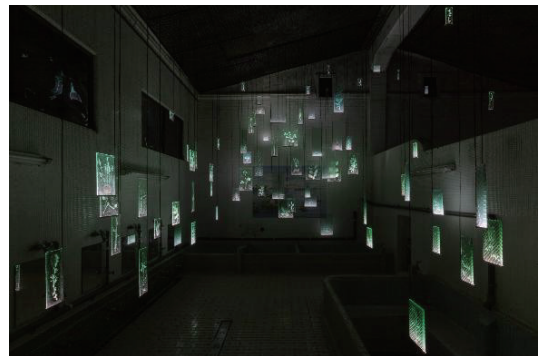
図表 2-3-2-12 国際芸術祭「あいち 2025」展示風景

ムルヤナ 《海流と開花のあいだ》 2019-



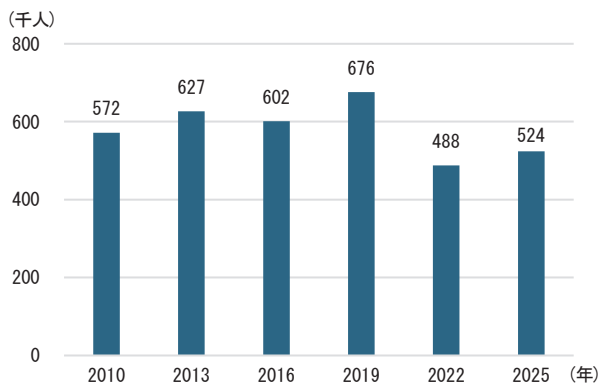
© 国際芸術祭「あいち」組織委員会
撮影：ToLoLo studio

佐々木類 《忘れじのあらい》 2025



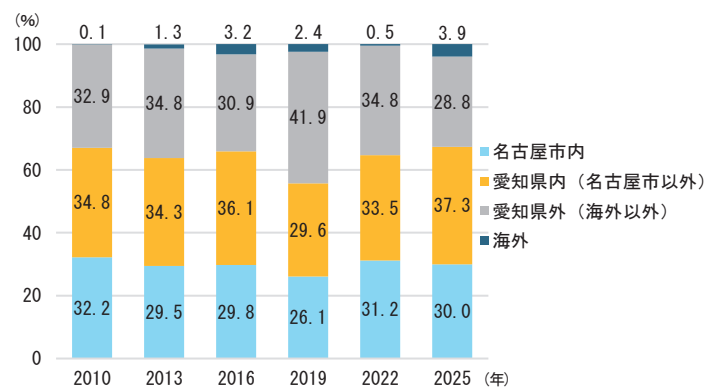
© 国際芸術祭「あいち」組織委員会
撮影：城戸保

図表 2-3-2-13 国際芸術祭あいちの来場者数



※2019年まではあいちトリエンナーレ
出典：愛知県県民文化局調べ

図表 2-3-2-14 来場者アンケートにおける来場者の居住地の割合



※2019年まではあいちトリエンナーレ
出典：愛知県県民文化局調べ

(2) 文化施設の活性化

愛知芸術文化センターや、国内屈指の陶磁専門ミュージアムであり、2025年4月にリニューアルオープンした愛知県陶磁美術館は、本県が文化芸術施策を展開する拠点施設です。これらの文化施設は地域独自の魅力であり、人を惹きつける重要な拠点でもあります(図表2-3-2-15、2-3-2-16)。

しかしながら、愛知芸術文化センターについては、充実した施設機能や名古屋「栄・都心部」という恵まれた立地を活かしきれておらず、美術館の企画展や劇場の公演時以外の人流が少なく、その存在感を十分に発揮できていない等の課題を抱えています。

そのため、本県は2024年4月に「愛知県文化施設活性化基本計画」を公表し、望ましい運営手法等の具体的な検討を進めた結果、開館30年を過ぎた愛知芸術文化センターの今後の一層の活性化を図るため、愛知芸術文化センターの建物管理及び愛知県芸術劇場の運営手法として、民間事業者のノウハウ等を最大限に活用した公共施設等運営権(コンセッション)方式を導入することとしました。2026年度を運営事業開始準備期間とし、2027年度から事業者(株)愛知芸術文化センターによる本格的な運営・維持管理業務を開始する予定です。

さらに、愛知県美術館及び愛知県陶磁美術館の運営については、「自主性に富んだ中長期的な美術館運営」や「学芸員の活動内容の充実や活動範囲の拡大」、「2館一体運営による運営の効率化や専門人材の配置、学芸員の成長に資する環境整備」等の効果が認められることなどから、地方独立行政法人制度を2館一体運営で導入することとし、2026年4月からの(地独)愛知県美術館機構による運営を開始する予定です。

図表2-3-2-15 愛知芸術文化センター



図表2-3-2-16 愛知県陶磁美術館



(3) 愛知の文化資源等を活かした地域力の向上

本県は、世界コスプレサミットなど、アニメーション文化と深く関わりを持っており、2024年3月にはジブリパークの全5エリアが開園し、世界中のアニメーションファンから注目を集めています。

こうした状況を踏まえ、本県では、名古屋市等と実行委員会を組織し、2025年12月に名古屋駅周辺の映画館において、国際的なアニメーション映画祭「あいち・なごや国際アニメーション・フィルム・フェスティバル (ANIAFF)」を開催しました(図表2-3-2-17)。

本映画祭では、世界各国・地域から集まった、ジャンルや表現方法を超えた最先端の優れたアニメーション作品を上映するとともに、各国のクリエイターやプロデューサーによるトーク、カンファレンス、ワークショップを通じて、国境を越えた交流の場を創出しました。

こうしたアニメーション文化の発信は、地域の文化的魅力を国内外に広く伝えるとともに、観光や産業の活性化にも寄与する重要な機会となります。引き続き、国際的なネットワークの強化やクリエイターの育成を通じて、次世代のアニメーション文化・産業をグローバルに発信していきます。

図表2-3-2-17 あいち・なごや国際アニメーション・フィルム・フェスティバル
ロゴマーク

© ANIAFF

このほか、2025年度からは、若手芸術家の活動支援のために、県営住宅等に併設された空き店舗を活用して、若手芸術家向けにアトリエを整備・提供し、創作活動を支援するなど、愛知発の芸術を生み出す取組を進めています。また、ユネスコ無形文化遺産として全国最多の登録数を誇る山車文化などの伝統文化や、あいち朝日遺跡ミュージアムにおける文化財といった本県が誇る文化資源を活かした地域力の向上を図っていきます。

4 訪日外国人旅行者のさらなる受入れと持続可能な観光の促進

新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大の影響により落ち込んだ、本県の訪日外国人旅行者数は、コロナ禍の収束とともに回復傾向にあります。東京都や大阪府等と比較すると依然として少ない状況にあります。国内旅行者はもとより、さらなる訪日外国人旅行者の受入れに向け、消費志向の変化への対応に加え、愛知ならではの魅力・強みを最大限活かした観光コンテンツの高付加価値化や受入環境の整備を図る必要があります。

本県には歴史や産業、自然、文化、食などの地域資源が豊富に存在しており、「さすが」と言いたくなる「観光県・あいち」をめざし、これらの豊かな地域資源を、その道の「ツウ」な人でも満足できる付加価値の高い観光コンテンツとして磨き上げるとともに、「ツウ」な人々に的確に情報を届け、誘客につなげるあいち「ツウ」リズムを推進しています（図表2-3-2-18）。

図表2-3-2-18 あいち「ツウ」リズム ロゴマーク



また、2025年9月に Aichi Sky Expo において、本県では初開催となる世界最大級の旅の祭典「ツーリズムEXPOジャパン 2025 愛知・中部北陸」が開催され、本県の多彩な観光コンテンツをPRしました。

イベントでは、本県や県内市町村・観光協会が個性的なブースを出展するとともに、今回初の試みとして、中部圏9県が共同ブース（富山県、石川県、福井県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、滋賀県）を出展し、「自然」「食」「歴史」「ものづくり」のテーマごとに、中部北陸が誇る多彩な魅力を発信しました。

4日間で海外82の国と地域、1,350の企業・団体が出展し、会期中は127,677人の来場者が訪れ、愛知の魅力を国内外の多くの方に知っていただく絶好の機会となりました（図表2-3-2-19）。

図表2-3-2-19 ツーリズムEXPOジャパン2025 愛知・中部北陸



さらに、本県の強みである歴史観光においては、訪日外国人にも人気のコンテンツである「武将」「お城」「街道」のテーマを掛け合わせ、統一的にPRし、歴史観光スポットを巡るデジタルスタンプラリーや各種イベントの開催など、県内の観光資源の魅力を広くアピールする取組を進めています。また、2026年の大河ドラマ「豊臣兄弟！」を活用し、周遊ドライブマップの作成、滋賀県や奈良県と連携した周遊キャンペーンを実施するなど、統一的なPR・プロモーションにより、観光誘客、周遊観光の促進を図っていきます（図表2-3-2-20）。

図表2-3-2-20 武将のふるさと愛知・あいちの歴史観光 ロゴマーク



加えて、現在の世界的な「発酵食文化」への関心の高まりを背景に、2024年5月に県内の有識者、業界団体、自治体、商工観光団体等の幅広い関係者とともに「愛知『発酵食文化』振興協議会」を設立し、地域一丸となって愛知の「発酵食文化」の振興を図り、世界から多くの人を呼び込むための取組を実施しています（図表2-3-2-21）。

WebサイトやSNSによる情報発信のほか、発酵食文化を活用した新たな事業創出支援の取組や訪日外国人旅行者の受入環境整備に向けた蔵元等への伴走支援、通訳ガイド育成のワークショップの開催など、様々な支援プログラムを実施しています。2025年10月からは、「あいち発酵食の館」登録制度を創設し、本県の発酵食文化の振興に対する飲食店の当事者意識の醸成と地域一体となった受入態勢の整備・強化を図るとともに、来店者に本県の発酵食文化の魅力を訴求することにより、「うまみ県あいち」のブランドを確立し、世界から多くの人を呼び込むことをめざしています。

図表2-3-2-21 「うまみ県あいち」ロゴマーク

～多彩な発酵食文化の物語～

うまみ県あいち



また、アジア競技大会・アジアパラ競技大会などの大規模イベント・プロジェクトを活用し、本県の多彩な魅力や観光コンテンツ等を積極的にPRするとともに、中部地方の各県や国、観光地域づくり法人とともに、広域での観光誘客や周遊観光を推進していきます。

とりわけ、アジア競技大会・アジアパラ競技大会期間中は、夜間の観光需要が高まると見込まれることから、夜間の観光価値を高めるため、名古屋市や名古屋鉄道(株)と協働し、名古屋市内中心部をオープントップバスで走行するナイトツアーを開催するとともに、ルート上の主要施設におけるプロジェクションマッピング等の演出を計画しています。こうした取組により、大会期間中の滞在満足度を向上させるとともに、大会後も継続的な誘客につながるナイトタイム観光の定着を図っていきます。

一方で、オーバーツーリズム(観光公害)により、混雑や騒音、マナー違反などの問題が地域や住民の生活、自然環境に悪影響を与える側面もあることから、観光客の受入れと住民の生活の質の確保を両立させ、持続可能な観光地域づくりを推進していく必要があります。

そのため、本県では、愛知県「休み方改革」プロジェクトの一つとして、混雑を回避した旅行を促す「あいちスキ旅キャンペーン」等を実施し、観光需要の平準化の促進に向けた取組を進めています。

5 居住地としての魅力の創造・発信

東京一極集中の傾向が加速する中、本県においても東京都への転出超過が拡大しており、2024年の東京都への転出超過数は全国の道府県で最多となりました。そこで、本県の居住地としての魅力をより一層高めていくとともに、県外からの移住・定住に向けて本県の「住みやすさ」を発信する取組を進める必要があります。

そのため、本県では、強い経済基盤や安定した雇用環境、優れた居住環境など、東京圏や大阪圏と比べた愛知の強みである「住みやすさ」について、Webサイトやパンフレット、動画を活用した情報発信の取組を2017年度から継続して実施しているほか、2024年度には、新たなパンフレット「あいちぐらし54のいいとこコレクション」を作成し、県内54市町村の魅力を発信し、移住先の候補として関心を持ってもらう取組を進めています(図表2-3-2-22)。

図表2-3-2-22 パンフレット「あいちぐらし 54のいいとこコレクション」



さらに、ふるさと回帰支援センター（東京都有楽町）内に、移住相談対応を行う窓口を2021年度に設置し、専属の相談員を常駐させることで、相談体制を強化し、移住定住を促進しているほか、首都圏等県外からのU I Jターンを促進するため、名古屋市と東京都に「あいちU I Jターン支援センター」を設置し、U I Jターン希望者に対して県内企業の求人情報の提供や個別相談等の就労支援を行い、中小企業をはじめとする県内企業の人材確保を図っています。

特に、県内で人口減少が進んでいる東三河地域については、東三河振興ビジョン 2030に基づき、関係人口の創出・拡大と移住・定住の促進に向けた取組を進めています。

2022年度から3年間、重点プロジェクトとして、「大都市の企業・個人を対象とした東三河関係人口、移住・定住の創出」を実施し、東三河の豊かな食と農を首都圏に向けてPRし、ビジネスマッチングにつなげる取組や日本最大級の移住イベントへの出展等、関係人口や移住希望者の増加を図る取組を進めました（図表2-3-2-23、2-3-2-24）。

今後も東三河の特徴を活かしつつ、新たな魅力や価値を創造し、東三河地域の関係人口の創出と移住・定住を促進していきます。

図表2-3-2-23 ビジネスマッチング交流会



図表2-3-2-24 移住イベントブース出展



また、県内では大学進学時期の年齢層の転出超過が大きくなっていることから、県内の大学を志望してもらうために、大学が企業等と連携して行うPBL (Project-Based Learning) の推進や清華大学、上海交通大学、浙江大学、シンガポール国立大学、IMT Atlantique（フランス）といった世界トップレベルの大学との連携などの取組により、県内大学の魅力を

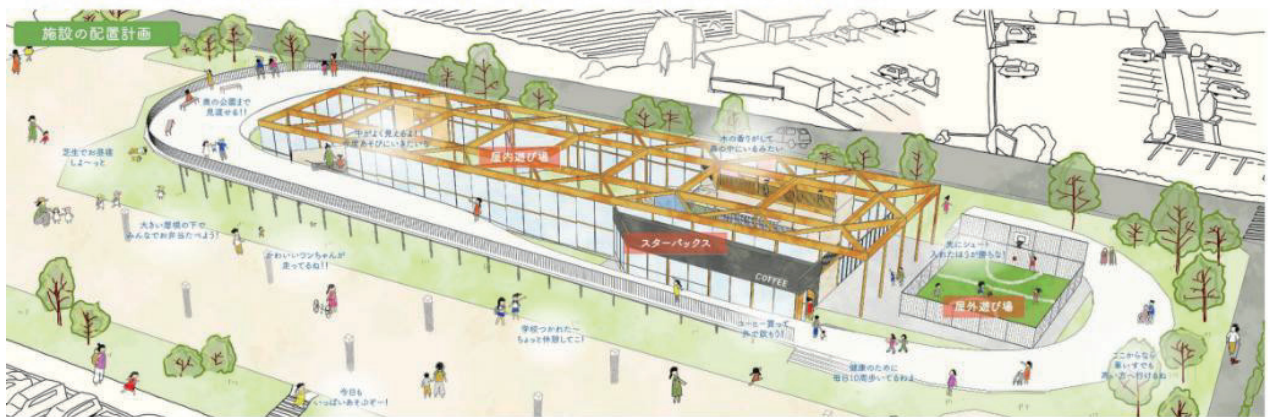
高め、ブランド力や知名度の向上を図っています。

さらに、魅力あふれる地域づくりに向けて、県営都市公園のさらなる魅力の創造と利活用の促進の取組も進めており、あいち健康の森公園ではPark-PFI制度の活用により、2025年から新たな公園施設（屋内遊戯施設等）の整備を進め、2026年夏にオープンを予定しています（図表2-3-2-25）。

このほか、半世紀以上にわたり県民に親しまれてきた県営都市公園大高緑地についても、未整備区域の有効活用による新たな魅力の創造や公園の再生によるバリューアップ、機能的な施設配置による利便性の向上等、大高緑地のポテンシャルを最大限に活かした新たな将来構想について検討を進めています。

図表2-3-2-25 あいち健康の森公園 施設イメージ

誰もが楽しみ方や居場所を見つけ 賑わいが公園全体に波及する 人と公園をつなぐプラットフォーム



加えて、本県を居住地として選択し、定住してもらうためには、シビックプライドの醸成が重要であり、2022年の県政150周年を契機として制定された、あいち県民の日・あいちウィークの周知・啓発や、2024年11月にSTATION Ai内にオープンした「あいち創業館」の活用などを通じて本県に対する愛着や誇りを一層深めていただく取組を推進していきます。